

六 眞似から出た本眞

徹底と云へばとて、最初から其の境に至られるものではありませぬ。先づ皮相より未徹底に至り、未徹底より遂に徹底に達するのである。皮を得たるものは肉を得、肉を得たるものは骨を得、進んで髓を獲取するの概を要する。自己を絶対絶命の處に置いて、一切を投下し去つて、大悲に安住するのである。眞似でよいから、初は型に嵌て行く。その嵌めた型に生命を生じ來つた時、始めて徹底して澁刺たる血が通ふことになる。信仰は如來の救濟にあづかると云ふの外に何も無い。併しこれは型である。この型が實際になつて、今現にこの私が助けられるのである、救はれるのである。私を措いて他に救はれる者はないとまでに感じ來つた時、胸が躍つて、御慈悲がキビくことたへて來る。信仰が型だけに止まらず、内容が充實して、實際に生きて働くことになる。その味は所謂冷暖自知だ。

一口に飲みたる水の味を、問ふ人あらば如何に答へん
何とも答へやうはない、飲んで御覽と云ふの外はありませぬ。

石州の或る富豪の老翁に、至つて信仰厚き眞實信者があつた。常に念佛を口にして居る。一年に三分の二以上も、此翁の用事をさして貰つてゐる出入の按摩。心易さに戯れて「そんなにお念佛を稱へなされては、極樂は通り越して、十樂へでも御出になるでせう」と云つた處、何がさて、一徹の老翁大立腹「勿體ない事を申し居る、言語道斷な、サア歸つてくれ、そのやうな事を言ふ者は、再び俺の側へ來てくれるな」と氣色ひどく追ひやられて仕舞つた。何程謝罪つても聞入れられぬ。いくら悔んでも仕方がない。明日の日からは、「口に鍵をかけねばならぬが」と、お粥腹たゝいて泣いて居ます處へ、頓知のよい友達がやつて參つて、「何さそれは心配するには及ばぬ、御隠居さ

んが念佛好きなら、お前も日に幾遍でも大聲に念佛して、隠居所の邊を聞えよがしに、行きつ戻りつするがよい。さうすると、あの按摩も今では念佛者になつたらしい、出入を許してやるといふのは必定だ、早速やつて見よ」と元氣づけられて、如何にも合點し、按摩は毎日く十日も二十日も、教へられた通りに、高聲念佛して通るけれども、一向效驗がない。これはよはつたと、再び例の友達に相談すれば、「それでは致方もない、それでは少し横着ではあるが、許しも待たずに隠居所の御佛前に座し、一生懸命に念佛してみなさい、隠居が何とか云はるゝであらう。すればそれを手掛りに、再び御出入の御許しを願つたが好からう」と教へて呉れたので、按摩さん大喜び「こいつはよい思付きだ、やつてみませう」と固より勝手は知つたり、按摩さんズカ／＼と隠居所の御佛前に座り込み、一心不亂脇目もふらずに念佛申すこと二時間ばかり、怪訝な顔つきで、凝と様子を見て居た隠居、まさか押し除ける勇氣もなく、嫌ひなお念佛でないから、作すに任せて置く中、いつしか自分も釣込まれて、按摩の背後にニジリ寄り、一緒に念佛を稱へ出した。按摩は驚いた風に席を退き、又も念佛を始める。隠居の如何にも嬉しさうな、有難さうな舉動を見るにつけ、熟々自分の心の淺間しさが知られ、あの殊勝な人を計略にかけて居るかと思へば、何だか空恐しくなつて、濟まぬ申譯ないと、隠居の前に平伏して、「御隠居様、私の念佛は嘘念佛で、實は計略でございます」と泣入れば、隠居も可愛想になつて「ア、計略でも何でもよい、念佛する身になつてくれたのは、何より有難い」と、聞いて按摩は益々痛入り、ア、斯様な淺間しい奴を御助けかと、今度は御本尊に眞實の御禮を遂げることになつて、御慈悲がぞつこん滲み込み、本眞の信者になり、出入も許されて、好い法義友達になつたと云ふ。

念佛ねんぶつの力ちから、眞しんに大だいではありませんか。按摩あんまは自分じぶんの生活問題せいかくわつもんたいといふ實際じつさいに打衝ぶつツて、計略けいりやくから眞實しんじつに入り、型かたから生命せいめいが出來たのである。元曉げんぎょう律師りっしの曰いはく「我わが彌陀みだは名なを以もつて物ものを攝せつす、故かるがゆゑに耳みみに聞き口くちに誦じゆするに、無邊むへんの聖德しょうとく識心しきしんに攬入らんにかして、永ながく佛種ぶつしゆとなり、頓とんに億劫おくこくの重罪ぢゆうざいを除のぞく」と。誠まことに所以ゆゑんあるかな。